海外・帰国
あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Ｅメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

佐々　信行
さっさ　のぶゆき
啓明学園初等学校　校長

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）、・ワシントン補習授業校を経て、現職。

啓明学園　初等学校・中学校・高等学校
東京都昭島市拝島町 5-11-15
代表：　042-541-1003
国際教育センター：　042-546-5881
www.keimei.ac.jp

日本文化の体験

「イマージョン・プログラム」の教室で（2）

中学年の教室で

近年、小さい子どもたちを伴って海外で暮らす家族が増えてきました。補習校の在籍数を見ても、低学年の割合が多くなってきていますし、幼稚園を新たに設置したところもあります。どの年齢で海外に行き、どの年齢で帰国するにしても、それなりの難しさがありますが、私の学校の最近の例を見ると、小学校２年生から４年生ぐらいの間海外にいた子どもたちが苦労する場合が多いようです。どうも、このくらいの時期は、言語の習得の上で要注意の時期と言えそうです。イマージョン・プログラムの経験と照らし合わせてみると思い当たることがあるので、今回はそのお話をしてみたいと思います。

イマージョン・プログラムでは、子どもたちの学習の成果を見てもらうために発表会のようなものをすることがあります。１年生や２年生が簡単な劇などをすると、子どもたちの日本語はほんとうに自然で、目を閉じて聞いていると日本の子どもたちが話しているのと区別がつかないくらいです。日本から来たお客様などは、たいそう感激して、「すばらしい」とほめてくれます。ところが、３年生ぐらいになると、子どもたちの話す日本語に少し英語風のアクセントが見られるようになってくるのです。「あんなに自然な日本語を話していたのに、日本語が下手になって来たのだろうか」と一瞬がっかりしてしまいそうになりますが、けっして日本語の力が落ちたわけではありません。（もっとも、アメリカ人のお母さんやお父さんは分からないので気にしませんが。）

１年生の日本語が自然なのは、彼らが、先生が話す日本語をそのまま覚えて繰り返しているからです。大きい子どもたちでも、「お手洗いに行ってもいいですか。」のようなときには、まったく不自然さのない話し方をします。３年生の日本語にアクセントが出てしまうのは、覚えたことを繰り返すだけでは間に合わなくなり、自分で新しい文を作るようになるからです。例えば、１年生は「水を飲んでもいいですか。」という表現を繰り返すだけですが、３年生は、言葉を入れ替えることで「ジュースを飲んでもいいですか。」「牛乳を飲んでもいいですか。」などと言うことができるようになります。「ジュース」や「牛乳」という単語と「～を飲んでもいいですか。」という言い回しを組み合わせて、新しい文を作るのです。出来上がった文は、全体としては聞いたことがない場合もあります。それを自分で考えて発音するとすれば、第一言語である英語の影響が現れても不思議はありません。まして、使う単語が辞典などで調べたものであれば、文字でしか知らない言葉を音にするという作業もすることになります。つまり、英語なまりの日本語が聞こえるようになるのは、子どもたちが日本語